

る。トンガの島々ではブタの群れが浜の浅瀬をうろついている。さらに多くの島では、そこらじゅう、おびたしい数のイヌが徘徊する。ハワイのモロカイの島影（俗にクジラ牧場と呼ばれる）では年がら年中、クジラが潮吹きに余念がない。イヌとブタだけは、かろうじて家畜めいているが、それでも人間が深く関与しているようには思えない。野鷄にいたっては、まるで野生動物そのものであり、人間の「に」の字も感じられない。

これらについては、本書を読めば、たちどころに謎が解ける。まさに再野生動物のしたたかさなのであり、地球上のどこにでも各種の家畜が再野生化しているようだ。かつてヨーロッパ人の船乗りたちが生体で運び、緊急用の非常食として中継地での補給のために解き放した動物に多くは由来するらしい。そんなことを確認できた。なるほど家畜化は可逆的過程なのだ。

さらに評者の個人ごとで恐縮であるが、生来のネコ好きで、ウマ好きでハムスター好きの評者には、ことにネコとウマのことにに関して、大変多くのことを学ばせていただいた。たとえば、ネコの毛色の神秘。さらに尾曲がりネコのこと。昔、大学に入るために京都に來た評者は京ネコに違和感をおぼえたものである。ネコには出会うが、よく見慣れていた短尾（尾曲がり）ネコが異様に少ない。どれも長い素直な尻尾を振りまわしている。その記憶がよみがえるとともに、実際に「京には尾の長い唐猫」という言い伝えがあることを知らされて、とても感激した次第である。ともかく、ネコ愛好家にはたまらない章では

あろう。ウマの章では、筆者たちの研究によってようやく、日本在来馬の起源が解明されつつあることを教えられた。考古学方面の関係者にも是非とも一読ねがいたいものだ。ただひとつ本書に、ハムスターの章がないのは残念だった。

ともかく本書により家畜に関する多くのことを教えられた。とてもためになる気がする本であった。だから絶妙な読後感にひたることができた。読書そのものを愉しみ、主人公たる在来家畜たちに癒され、著者たちが研究活動の根本におくフィールドワークの楽しみをヴァーチャルに追いかけて、同時に人間の歴史の営みについても目新しい側面のあることを教えられたように思う。

籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワークー長期の19世紀』世界思想社、2009年、358p.

島田竜登*

近ごろ稀にみる優れた論集である。本書は、19世紀のアジア経済史をテーマとする論文集であるが、ヨーロッパさらには世界全体を視野に入れ、新たな世界史像を模索しようとする試みである。京都大学人文科学研究所における共同研究の成果の一部で、理論的大胆さと綿密な実証が見事に絡み合っており、硬質の良書となっている。

まずは、各章ごとにその内容を紹介・検討

* 西南学院大学経済学部

してみよう。はじめに、総論「19世紀アジアの市場秩序」(籠谷直人)では、各章の要旨が示されるほか、本書全体にわたるキーワード(旧帝国、ネットワーク、自由貿易など)に関して従来の見方への再考を促す。アジアの旧帝国と商人ネットワークとの関係性を長期的な視野で考察し、近代資本主義の一側面たる自由貿易制を考え直すことが重要と説く。

第1章「帝国と互市」(岩井茂樹)は、近年、清代対外貿易の見直し作業が続けられている著者による「互市」論の総括的整理である。また、本章は、中国史の枠を越え、本書全体の問題提起の役目も果たしている。すなわち、19世紀、西洋列強によるアジア諸国への自由貿易の強制に先立ち、アジアでは「朝貢」システムのフレームを自ら打破し、「互市」的な一種独自の「自由貿易」が成立していたというのである。これにより、18世紀まで遡り、19世紀全般にまで及ぶアジア経済史を、「自由貿易」をキーワードに再構築することが本書全体にわたる通奏低音となる。

第2章「閩南商人の転換」(村上衛)は、19世紀末の厦門におけるアヘン貿易を論じる。外国アヘンへの課税、とりわけ損税の取り扱いによって、閩南人(福建人)商人が適宜その対応を変え、「台湾籍民」という身分にひきつけられてゆく過程を分析する。

続く第3章「18世紀後半のベンガルにおけるイギリス東インド会社の貨幣政策」(谷口謙次)は、インドに関する実証研究で、1765年のベンガルでの徴税権獲得後、1770

年代にかけてのイギリス東インド会社の現地での貨幣改革を検討する。会社内部でベンガル当局と本国との間で見解の相違が存在し、かつさまざまな貨幣改革がいずれも失敗におわり、ベンガル経済についてのイギリスの無理解が明白となる。

第4章「『長期の19世紀』アジア」(脇村孝平)は、18・19世紀のインド経済史について、最近の諸研究を基盤に、インド系商人・企業家・商業移民といったマクロ的視点、さらには、生態的制約として災害や疾病といったマクロ的視点から検討する。19世紀のインド経済を考察する際に必要な、18世紀からの連続性とイギリスの植民地化による不連続性の双方を指摘する。

以上の4つの章が、中国とインドというアジアにおける2大旧帝国の変容過程に迫ったのに対して、次の3つの章では、ネットワークに関する議論が展開される。第5章「東アジアにおける自由貿易」(籠谷直人)は、イギリスがなした19世紀における東アジアへの自由貿易原則の強制は、清朝のごときアジアの旧帝国の管理貿易体制の後退と、オランダ東インド会社の独占の変容とに対応したものだという仮説的見解を検証するもので、地域的範囲を日本から東南アジアまでに定め、時代的にも16世紀から20世紀までを対象としている。近世以来の福建系華僑は、オランダ勢力と結びつくことで、そのネットワークを展開できたが、オランダの勢力停滞とともに福建系の重要性が低下した。これとは対照的に、イギリス帝国主義と密接な関係を享受しえた広東系華僑ネットワーク

が19世紀以後に躍進したことを描き出す。

第6章「19世紀末の朝鮮をめぐる中国人商業ネットワーク」(石川亮太)は、朝鮮開港後における朝鮮の清国商人の確執について検討する。ことに広東系を中心とする中国人商人の開港場での飛躍的進出と、開港場とは直接のかかわりのない在来型船による黄海沿岸地域での山東系中国人商人の貿易活動を明らかにし、朝鮮に伸びた中国人ネットワークの二重性を論じている。

第7章『『つなぐと儲かる』』(帆苺浩之)は、19世紀後半の世界的な広東系華僑ネットワークを論じるものであり、在外華僑の同郷会館や慈善活動を分析する。そのほか、日本やアメリカ合衆国、キューバなどからネットワークを介した故郷への遺骨送還についても論究する。なお、評者は、この越境する遺骨という異色の研究素材は、従来のネットワーク研究や近代史研究に大きな発展をもたらさうと考える。一見するとグロテスクな素材である越境する遺骨という題材を通じて、近代国家の枠組みを乗り越え、ネットワークがいかに機能したのかを分析し、近代世界の2側面を合わせ論じることが可能だからであり、本章はこの面で優れて成功している。

巻末の4つの章では、アジア間貿易の形成と展開についての検討である。第8章「環ベンガル湾塩交易ネットワークと市場変容」(神田さやこ)は、1820・30年代を「長期の18世紀」の終焉期としてとらえ、それを18世紀後半からの環ベンガル湾塩交易ネットワークを題材に検証する。イギリス東インド

会社が作り出した塩独占体制が「長期の18世紀」の終焉期には崩壊し、その独占体制に依存していたカルカッタの大商人ではなく、「国家」から独立した商人の台頭を明らかにし、イギリス商人のみならずアジア商人の参入を活発にした自由貿易体制に向けた再編が18世紀後半には進行していたと結論づける。

杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』(ミネルヴァ書房、1996年)においては、1880年代以降のアジア間貿易を対象としたが、これに先立つ19世紀前半のアジア間貿易の統計的分析を試みたのが、第9章「19世紀前半のアジア交易圏」(杉原薫)である。結論としては、アジアでの貿易は、アジア間貿易の比重が、アジアと西洋との遠隔地貿易の3分の2をはるかに超えたとし、むしろ、従来の研究が強調してきたウェスタン・インパクトの限定性を強調する。すなわち、英蘭の2つの東インド会社と清朝の貿易制限が弛緩し、カントリー・トレーダーやアジア商人が、インド周辺から、東南アジア、中国に急速に広がり、域内貿易が成長したというのである。

第10章「20世紀初頭における香港の銀本位制」(西村雄志)ならびに第11章「イギリス帝国下のイースタン・バンク問題」(川村朋貴)は、アジア間貿易を裏から支えた通貨および金融の面からの考察である。第10章においては、20世紀初頭の香港の銀本位制の問題をテーマに、香港と中国諸地域との間の銀移動について検討する。香港の銀本位制に基づく銀行券が、国際金本位制の枠組みが世界経済に急速に浸透する中で、中国とい

う銀利用圏と世界の金本位制との間を上手く取り結んだ点を明らかにする。一方、第11章は、19世紀半ば以降、イギリス東インド会社にかわり、アジアでの貿易金融を業務としたオリエンタル銀行やチャータード銀行といった「イースタン・バンク」の英領インドや海峡植民地での展開に焦点を当てる。

本書の一大特色は、現在のわれわれの生きる時代を考える際に極めて重要であると考えられ、かつ近代への転換期ともいべき19世紀を、比較的長期のフレームワークの中に入れ込み、近代そのものを再考するという大胆な発想と構想である。もちろん、これまでの研究範疇においても、19世紀は重要な時期と認識されてきたが、それは西欧列強東漸の世紀としてであり、アジア史においては、植民地化という受け身の歴史か、せいぜい、それへの抵抗の歴史の叙述に過ぎなかった。多くのアジア諸国は、植民地化ないしは半植民地化の過程をたどった。また、そこまで達しなくとも、ウェスタン・インパクトを受け、いかに対応したのかを問うことが近代研究の主眼であったことは、なにも経済史に限らず、政治史、社会史、文化史といった歴史学全般に共通する。にもかかわらず、本書は、こうしたこれまでの歴史研究の流れに竿をさし、新たな発想で歴史を再構築することを提起する。たとえば、自由貿易はむしろ18世紀にアジアでヨーロッパとの相互補完関係の下に実現されたなど、旧来の発想であるヨーロッパとアジアという二項対立を超越し、ユーラシアや世界といった規模で全体を眺めつつ、歴史の実状の解明に取り組んでい

るのである。

もちろん本書への不満や懐疑も多様であろう。たとえば、第一には時代設定についてである。本書副題が示す「長期の19世紀」という表現にもかかわらず、この期間の始まりが明確ではない。「長期の19世紀」の開始時点は各章の論者によって異なるのである。ただ、18世紀初めから20世紀初めまでという約200年以上に及ぶ歳月こそを、近代移行期として示したいというのが本書全体の趣旨なのであろう。西洋列強のウェスタン・インパクトが世界に近代を拡げたのではなく、本書が示唆するように、相互に影響しあい、近代を長い時間をかけて作り上げたのである。その意味で、「長期の19世紀」という表現には本書の主張する議論の過渡期的性格が伺え、今後は、その使用を思いとどまった方がよいかもしれぬ。

第二には、実証研究における地域的対象の狭小さについて指摘しなければならない。本書が対象とする地域はアジア全体とは言い難く、たいていの各章は、中国やインドといったアジアの大国を分析するのが精々である。もちろん、中国やインドの重要性を否定する意図は毛頭ないが、本書が、アジア経済史をベースに、ひろく近代移行期の世界経済を論じようとするには、他のアジア地域についても検討すべきであろう。たとえば、同時期のタイやイラン、トルコは同じような過程をたどったのであろうか、あるいは否か。これは本書が示した仮説を今後さらに実証的に検証する際の課題のひとつとなろう。

とまれ、本書は、傾聴に値するさまざまな

議論を数多含むが、同時に、今後の研究課題も多分に存している。問題提起の書であることは間違いない。21世紀には21世紀の風が

吹く。本書をして新たな近代世界史像構築に向けての第一歩が記されるのである。